

第3章 病院内遺跡 A E15の発掘調査

1 調査の方法

医療技術短期大学部校舎等新営工事の予定地は周知の遺跡ではなかったが、文献考証等により、いくつかの建築遺跡が埋蔵されている可能性があった。古くは平安時代末の旧白河一帯の条坊や、そこに営まれた建築群がそれである。

旧建造物（元医学部眼科教室、後に同口腔外科教室が使用）撤去後、新営建物予定地の4隅と次期計画地の3隅、および共同溝の北端の計8ヶ所にテストピットを設け、土層と遺物の包含状況を調査した（図版58）。その結果、新営建物予定地の東側の2つのテストピット（TP3・4）、さらに、次期計画地のTP6、TP7から土師器片・古瓦片等を包含する暗褐色ないし灰褐色の土層を検出した。

この試掘調査の結果をもとに、工事によって掘削される範囲のうち、本年度の工事事画にあたる部分合計2,200㎡をまず全面的に発掘調査し、次期計画地については来年度（昭和52年度）調査することになった。

調査対象区域のうち、新営建物予定地では、中央に幅約2mの畔を設けて東西に2分し、それぞれE-1区、W-1区とし、E-1区から北に延びる共同溝区をE-2区とした。

試掘調査の結果により、表土層および旧建物の基礎を機械によって排除し、表土より下層を分層発掘した。

なお、旧建物の基礎跡を利用して、東西方向のサブトレンチをE-1区に1条、W-1区に2条、さらに南北方向は中央畔の東沿いに設け、各々断面層位を観察した。

途中の遺構面は、部分図のほかは50分の1平板実測にとどめ、最終遺構面では、平面・壁面ともに20分の1割付実測を行なった。

なお、巻末図版の実測図上のグリッドラインに付記した数値は、構内座標値である。
(岡田)

2 層位

現地表は、明治期の京大病院建設時の整地層上面で、敷地東比部で標高47.0m、西南部で46.5mとごくわずかに鴨川にむかって傾斜している。

調査地区の基本的な層位は、表土（A層）、暗褐色砂質土（B層）、暗灰色砂質土（C層）、

明灰色ないし黄灰色砂質土（D層）となり、以下は地山または氾濫による砂礫層とシルトの堆積である。最終遺構面を形成するD層上面で、標高45,0～45,5mである。各層位はさらに次のように細分できる（図版59～62）。

A層は表土であるが、最上層の病院時代の堆積土は、旧建物解体時に重機類で相当に攪乱されているため除外し、それ以下の2層からなる黒色の耕作土層をA層として扱った。やや褐色味を帯びた上層（A₁）と灰色のやや強い下層（A₂）とである。調査区全域に厚く堆積しており、下面はW-1区西南端で最も低く標高45,8m、E-2区北端で最も高く同46,2mである。泥面子・土人形類等の玩具類をはじめ、主として近世の半ばから明治初年頃までの遺物を含む層である。

B層はかなり削平を受けているようで、水平層としての堆積はごく薄く、しかもE-1区の南東部あたりに限られるが、多数のピットや井戸の埋土となっている土層である。E-1区内では、土師器細片のほかに江戸時代の国産陶磁器片まで含むB₁層と、黄褐色シルトを若干混えてほとんど遺物を含まないB₂層とに細分でき、W-1区南東部では、B₁層は比較的厚いがB₂層はなく、西寄りでは逆にB₁相当層がなくB₂に近似するが礫をやや多く含みかつ粘質に富むB₃層が現われる。B₂・B₃層からは遺物が少なく、確たる年代推定はむずかしいが、近世の遺物は見当らない。

C層はおびただしい土師器の小片が混入する層で、さらに3層に細分される。上のC₁は最も黒味が強く、室町時代に特徴的とされる土師器のいわゆるへソ皿を出土する。中の層C₂はC₁層よりもやや明るい赤味に富み、平安時代後期から鎌倉時代にかけての土器・瓦・石製品を出土する。C層中最も厚い堆積をみせ、今回の調査による出土遺物の大半はこの層の発掘によるものである。下層C₃はC₂層の堆積以前に削平を受けたのか、ある時期に低位の地面をかさ上げするために盛られたのか、一様には検出できない層位である。C₂層よりも黄味を帯び、遺物の出土はあまり多くないが、鎌倉時代初期までの堆積をみてよさそうである。なお、一部E-1区の堆積の中でC₁層、C₂層の間に砂層がはいり込み、C₁層は一見C₂層と類似しているが、年代的にはB₂層と近い時期を考えた方がよいようである。

D層はやや黄味の強い上層D₁と、青緑色がかった下層D₂とに分れ、ごくまれに土師器の細片を含むほかはC層に比べて礫の混入も少なく、均質な土層である。この下方には、無遺物の氾濫砂礫層あるいは一部に明灰色シルト層が堆積している。一応これを地山E層とする。

以上が調査地区の標準的な層位であるが、端部特にW-1区では、西方ほどA層とE層

との間隔が縮まり、標準層位とは異質の包含遺物の少ない暗黄褐色の粘質土や近世の瓦礫を多数含んだ砂礫層が、B・C・D層にかわってはいり込んでいる。

なお、当遺跡の最終遺構面は、C₃層上面ないしはD層上面に形成されたものであるが、そこに至る過程でA層を取り去った段階での第1遺構面、さらにE-1区中南部を中心にB層を取り去って検出された第2遺構面においてそれぞれ別個の遺構を検出した。

(岡田)

3 遺構

遺構は、前述した3つの遺構面ごとにほぼ3時期の遺構群に大別できる。平安時代後期から鎌倉時代中期の遺構群を第1群、室町時代後期から江戸時代初期にかけての一群を第2群、江戸時代後期の耕作遺構と明治時代初期の病院建設時までの遺構を第3群とする。検出した遺構のうちわけは建物1、池1、溝18、柵51、井戸12、土坑7、ラチス状掘形列10、石敷その他7となる。以下の記述では建物S B、池S G、溝S D、柵S A、井戸S E、土坑S K、ラチス状掘形列S L、石敷その他S Xの記号を用いる。

第1群の遺構

S G11 E-1区中央部から北壁にかけて検出した池状の落ち込みである。落ち込みの深さは約60cm、幅は東西5m前後で両肩とも少々入り組んでいて、底部は東半分が柵状にやや高い。南端は底からの立ち上がりが肩の高さまで達せずに再び西寄りに落ちこみ、溝S D108の北端部に接続する。埋土は底面に薄く暗灰色粘土層がはりつき、C₁層に類似するが砂質の強い土がその上に堆積する（図版63）。最下の粘土層上面から12世紀末頃の山茶碗（H K 2）が出土し、その上の砂質土からは平安時代の羽釜（H H 19）、やや時代の下る山茶碗（H K 3）の出土をみる（図版44）。これらの層の上にはほとんど礫も遺物も含まない黄褐色砂層が堆積し、さらにC₁層がのる。これが苑池だとすれば、この部分は池尻にあたり、溢水時には南接する溝S D108が排水機能をはたしたものであろう。

S D101・102 W-1区東部に検出した南北に平行する2条の溝である。両者とも素掘りでS D101は幅約0.9m、深さ0.3m、S D102は幅約1.1m、深さ約0.35mである。ともに方位はほぼ真北で、両溝の間隔は約7m、W-1区の北部では後代の削平によって消滅しているが、南は調査区域外へと延長する。溝中の堆積土は、E-1区内の溝ではC層にきわめて類似したものであるのに対し、それとは全く異なり、両者とも礫を多く含む暗灰色シルトである。S D102の方は遺物が豊富で、特に12世紀中・後葉の瓦当3点をはじめ瓦類の出土が目立つ（図版18）。他に高坏の脚部、石鍋（H R 05・06）をはじめ、宗から元に至る輸入磁器も多い。埋土が近似していることから、両溝は廃絶期を同じくすると考えるべきで、その時期は鎌倉時代の中頃に求められよう。さらに、両溝が併存していたとすれば、その間は道路敷であった可能性が強い。なお、それが平安時代後期に設けられた白河地域の条坊とどういう関係にあるのかは今後検討を要するが、S D101の西側とS D102の東側では、遺物の出土量や遺構の密度がはなはだしく異なり、ここが白河地域の主要建築群の西

限ではないかとも考えられる。

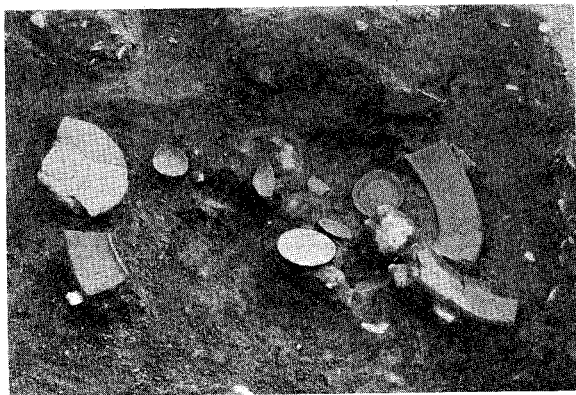
S D 103 C₃層上面から掘り込まれたほぼ真東西方向の素掘りの溝である。幅1.2m、深さは0.3mをはかる。E-1区南東部に現われ、W-1区東壁には断面が観察されるが、それ以西は0.8mで止まってしまう。むしろ中央の畔の下を南に向う形跡がある。東へも長くは続かず、S D 107の南延部と合流して南へ続くようである。この溝の検出面は、S D 104~106を検出した北側一体よりも標高が高く、しかも溝の南側には柱穴とみなしうる小ピットが並ぶことから、ここから調査区域外にかけて建物を想定したい。溝内はC₂層と差のない礫混泥土の単純な堆積で、鎌倉時代の後期を下らない短期間の溝であったと推定する。

S D 104 S D 103と同様、S D 107と接続して中央畔を越え西方へ全長12m前後に限られる溝で、真東西方向とみなしてよい。幅は東部でやや狭く0.8m程度、西部では約1.1mとなり、D層上面からの深さも西に深く0.4mをはかり、東部では0.25m程度である。溝内の堆積は、底面にわずかばかり粘土層があり、次いで大振りの礫をかなり含んだC₂層類似の粘質土がほとんどを占める(図版18)。出土する遺物は土師器を主として多量に及び、平安時代まで遡りうる皿・碗や灰釉陶器(HA 2)のほか、やや年代の下る土鍋(HD 5)を出土している(図版45)。ただし、E-1区側の中央畔下で後代の攪乱のあとが見られ、C類似層の堆積がある。

S D 105 S D 104の北側に隣りあう溝状の遺構であるが、W-1区東壁にその断面は現われず、しかも、東端はS D 107の手前0.6mで底は立ちあがってしまう。深さは約0.3m、幅は一様ではないがほぼ1m強で、北壁に沿って東宛りに幅約30cmの段部がある。C₂類似の堆積土中からは、完形の皿多数や高台付皿(HH 37)を含む土師器、瓦質の盤(HG 6)、

石鍋(HR 4)などが出土する(第9図)。溝内の堆積が単純であるので、存続期間は短いと考えられる。

S D 106 S D 104と7.5mの間隔で平行に、これもまたS D 107との接点から西へ延びる溝で、やや南に振って中央畔を1m余越えて消滅する。幅0.8m、深さ0.3m程度で、W-1区東壁にその断面を観察できる。



第9図 土器出土状態

C₂層が溝内に堆積するが、S D 104に比べて包含遺物はきわめて少ない。

S D 107 S G11に近接して、E-1区を南北に貫通する小溝である。幅は0.5m前後と狭いが、底面がほぼ水平になるように掘られていて、北部では40cm強、南部では約20cmの深さとする。すでに記したように、S D103、100、106の各東端部と連結するが、底面が同じレベルで続くのはS D 104のみで、他の2溝の底面はこれより約10cm高い。この溝S D 107を埋めるC₂層及び底面にわずかに見られる泥土層から出土する遺物は、瓦類が比較的多く、什器類は少なく、軟質で細かな叩き目をもつ甕片が多い。S D 104と同時期な掘削かあるいは併行する時代と考えてさしつかえないようである。

S D 108 先に記したように、S G11の末に連なる大溝で幅約1.9m、深さ45cmをはかる。E-1区南壁から3m余にわたって溝の埋土直上に、こぶし大の石敷がみられた。後世に埋めた際に土地の軟弱さを補ったものであろうか。S D 108の埋土の堆積はS G11とほとんど同じである。底の粘土上面からは、平安時代の大型緑釉陶器の切高台部分(H G 1)、灰釉の小壺(H A 1)、が出土した(図版44)。なお、東側に隣接して小溝S D 109を伴っているが、相互の関係は不明である。

S D 110 E-2区東南部で検出した東西方向の溝である。深さ20cm弱、幅70cmでE-1区東壁外へ延長されるが、西はS A 101付近で消滅する。途中、S E28がこの溝を断ち切る。溝からは多数の土師器のほか、鎌倉時代初期の常滑焼の甕口縁部(H K 9)緑釉三筋壺などが出土した(図版46)。

S D 111 S D 110の北4.8mに東西に走る溝である。かなり削平を受けたためか残りは浅く、東部では溝肩が消えてしまうが、遺存底面上から土師器の皿を多数出土した(図版18)。その東部からE-1区東壁にかけてD層上面にC層とはやや異質な砂質土がのっており、S D 111から出土する土師器と共通する厚肉大型の皿や坏多数を出土した(第10図)。この溝は西へいくにしたがって浅くかつ狭くなり、



第10図 土器出土状態

不規則に屈曲しながら S G 11 に落ち込んでゆく。

S D 112・111・114・115 S D 115 を除く 3 条は、互いに方位をやや東に振り、ほぼ 2 m おきに並ぶ溝状の遺構で、S D 115 のみその規則性にしたがわず、S D 111 に接続する。水を流すためとするより、何らかの抜き跡のように思われるが特格は不明である。いずれにしてもこのあたりは、後代にかなり削平されているようである。

S D 116 E-2 区南端部に検出された浅いが幅の広い溝である。方位はやや西に振る。深さ約 25cm、幅約 2.5 m。西端でやや南に張り出す。主に鎌倉時代の陶磁器類を出土する。

S A 11 E-1 区中央で、わずかに東に振れて南北一列に並ぶ柱穴群を検出した。7 間検出したうち。北端 1 間を除いて 1.98 m の平均スパンをもつ。一部は第 2 遺構面で検出していたもので、後述する S B 21 に先行する地上施設の跡を考えられる。一つの柱穴が S D 111 を切って掘られている。

S A 12 E-2 区の中央に検出した 1 列の掘形群で柱穴跡である。3 度の建て替えを認める。小さいながら礎石を使用していたらしい。南側に 10 cm ほどの段差があって後代の削平が考えられ、対応する柱列穴があった可能性はのこるが、一応棚列跡としておく。スパンは 2.4～2.5 m で、方位はわずかに西に振り、S D 116 と平行である。

S K 11 W-1 区の南部 S D 101 と S D 102 との間に位置する。鎌倉時代の土師器の皿が多く出土する。両溝間が道路であったとしても矛盾のない頃の土坑である。

S K 12 中央畔に断面が現われる土坑で、鎌倉～室町時代の遺物を多く出土する。

S K 13 S D 103 の南側にあり、E-1 区南壁にかかる土坑で、溝と同じ頃に埋められたものらしい。両遺構から出土する遺物は同時期のものである。

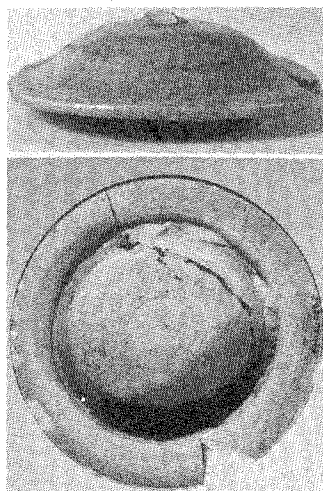
S K 14 S D 105 のすぐ北側にあって、西に浅く中央で段がつき東に深い長円形の土坑である。5 点出土した磁器片は宋～元のものである。

S X 11 W-1 区のサブトレンチ掘削中に検出した石積の遺構である（図版 18）。東部一部を断ち割ったおりに、灰釉陶器の片口付大平鉢 3 個体分（H A・05・06）をはじめ、鎌倉時代前期の遺物を伴出した。河原石を 3～4 段に積んだ石組で、底面は検出遺構面下約 0.3 m である。S D 104 の西延長上にあってこれと同時代の遺構であるが、両者の関連性は確認できなかった。

S X 12 S D 108 の東肩に沿って、平らな面を上にして並ぶ石群である。北側の畔の断面にその抜き跡らしい掘形がみえる。

第2群の遺構

S B21 C層上面(第2遺構面)で検出した。2列の柱穴群C₂層の上にある黄褐色砂層よりは後の遺構である。南北桁行8間で柱間各1.80m、梁行1間分は2.30mをはかる。西側の列のみさらに北へ2間分延長する。方位は若干西に振る。調査区域から南へ延びる可能性もあるが、E-2区南端近くで直角に東へ2間分連なる。ただし、このスパンは2.30mよりも小さくなっている。柱穴内から土師器の小片のほか、明代とおもわれる青磁の蓋(第11図)や石鍋の底部が出土した。室町時代を上限とする回廊様の遺構を想定できる。



第11図 柱穴内出土青磁

S K21・22 いずれもS B21と類似の暗灰色砂質土が堆積する土坑である。S K22はS B21の2列の柱筋の間に位置しており、時期はS B21の直後と考える。

S K23 黄褐色砂層を切り込む土器溜で、へソ皿(H H80)、片口鉢(H O07)など小堀形内に多数の室町時代の遺物を出土する。なお、坑内の土層はC₁層に相当し、S K21・22やS B21よりは先行する時期のものであろう。

S K24 S K23と同時期、同種の遺物を多量に包含する土坑である(第12図)。底面にはかなり凹凸がある。土器溜としては調査区域の中では最も大きい。

S E21 円形素掘りの井戸である。底面径1.30m、底面標高45.47m。井戸内の土はB₂層に酷似する。

S E22(図版69) 底面から0.2~0.5mの間に大ぶりの石を用い、それより上はずっと小ぶりの河原石を積み上げて作りあげた円形石組の井戸である。底面径0.90m、底面標高44.45mで、底面近くは、C層類似の泥土と砂層の互層となっている。底面から0.5m以上ではB層類似の堆積をみる。東側の石組は崩れがひどく、埋土中には落ち込んだ石多数を含む。



第12図 S K24土器出土状態

S E23 底面径1.10m, 底面標高44.84m。円形の素掘りで、江戸時代の遺物が多い。

S E24 底面径1.50m, 底面標高44.79mで、円形素掘りの井戸である。井戸内はB層類似の暗灰色砂質土が検出面付近まで堆積し、その上に検出面近くには小礫がつめられていた。それらに混じって寛永通宝が出土しており、井戸が廃棄された後、井戸跡を礫によってつき固めた時期を示唆する。なお、この井戸はS D 110を断ち切って掘られており、鎌倉～室町時代全般にわたる遺物が出土する。

S E25 (図版19・69) E-2区内の石組の井戸で、底面径0.75m, 上端内径1.10mと底面から朝顔型に小ぶりの石を積み上げたつくりである。底面標高は45.02m。井戸内には黒味を帯びたC層類似の砂質土が堆積し、多数出土する土師器の皿などの遺物は、この井戸が鎌倉時代から室町時代にかけてのものと推測させる。

S E26 円形素掘りで、底面径1.05m, 底面標高45.40mの井戸で、C層類似の土が堆積する。

S X21 礎石風に造り出しのある白川層を西端に、他は自然石の平坦面を上にして敷き並べた石敷の遺構である(図版20)。小ぶりの河原石を縁石として配し、全体は西へ下りぎみに傾斜する。東端近くには平瓦2枚を敷き並べてあった。建物跡を伴う確証はないが、東端に西面する祠のようなものを想定するのが妥当なところであろう。江戸時代初期頃のものであろうか。

S X22 第2遺構面から掘り込まれた幅・深さとも0.3m前後の掘形に、こぶし大の河原石がつめられた石列遺構でほぼ真南北に約7mにわたって並ぶ(図版20)。排水用の暗渠のようにおもわれるが、関連する施設は不明である。層位の観察からS B21と相前後する時期のものであろう。

S X23 幅約0.6mで南北約2.5mにわたる石群で、南半分は各石の平坦面を上にして丁寧に敷きつめられている。

S X24 E-1区東端近くに検出した方形に近い掘形をもった石組遺構で、底面標高45.25mをはかる。東・南壁の石組はほとんど崩れてしまっているが、内径は一皿約0.6mである。埋土はB層に近いもので井戸かもしれない。

S X25 上端径東西1.85m, 南北1.30mをはかる長円形で素掘りの掘形内に投げ込まれたような形で、比較的粗く河原石がつめられた遺構である。掘形はほぼ鉛直に掘り込まれ底面の標高は44.95mと低く、元来井戸であったかもしれないが、壁に石が積まれた形跡はない。出土する遺物は江戸時代のものである。

第3群の遺構

S A 301～S A 349 調査区域全域から検出したおびただしい柵列遺構で、すべて東西方向で現在の前面道路（春日通り）と平行しているが、方位をわずかに西に振る。いずれも2.5m前後の共通したスパンで、長いものでは12間分30mを越えるものがある。掘立柱で遺存している柱根から直径10～12cmの丸太を用いていたことがわかる。江戸時代の畑作に伴う遺構である。各柵列の規模・平均スパンを章末の第5表に示す。

S D31 中央畔のすぐ西側を南北に走る浅い溝で、方位はかなり西に振り、直線的である。前述のおびただしい柵列のうち、1列としてこの溝をまたぐものがないことから、この溝をはさんで耕作地が二分されていたものであろう。溝内のA層土からは多数の江戸時代遺物が出土した。

S E31 丁寧に作られた江戸時代後期の井戸である。底面の標高は43.63mで、底から0.3～0.9mの間は円筒形に羽目板を組んだ木枠をはめこみ、その上端から10枚の埦で内径0.76mの井筒を組み、さらにその上方に河原石を積み上げて壁をつくる。裏込めには細かな川砂利が丁寧に詰められている。用いられた埦の大きさは、縦29cm、横25cm、厚み3.3cmという規格で統一されている。

S E32 E-1区北壁にかかって半分だけ検出した井戸で、内径0.70m、河原石を丁寧に積み上げたものである。底面まで掘りきれしていない。

S E33・34・35・36 いずれも畑作のための肥料溜めの野壺で、しっくい壁である。厚みは5cmと均一で、円形の底面の内径は各々1.50m、2.00m、1.37m、1.47mでわずかにすり鉢状の底部となす。

S L 301～S L 310 2列ではしご状に連なる浅い掘形群をラチス状掘形とよぶことにする。最も長く遺存するS L 307では、30cm近くにわたって痕跡をとどめる。W-1区内に4列、E-1区内に4列、E-2区内に2列1組となるようにも受けとれる。L S 301が野壺S E33を断ち割って掘られていることから、この土地が耕作地ではなくなって以降の遺構と考えられる。時期は幕末から明治初期であろう。

遺構の年代

以上各遺構を個別にみてきたが、ここでは主要な遺構相互の関係を可能な限り年代を追って整理してみよう。少々大胆な試みではあるが、年表式に各遺構を配列してみると第4表のようになる。一応、各遺構の存続期の中心となる年代を想定して並べたものである。本遺構で最も年代の遡りうるのは、S G11・S D102・108・111が一体となった遺構群で、

平	SD102, SG11
安	SD108・111
	SD104・107
鎌	SD110
倉	SD103・105・106
	SK13
	SA11
	SE25
室	
町	SK23・24
	SB21, SE22・24
江	
	SA301～349
	SE31
戸	
	SL301～310

平安時代末から鎌倉時代前期の間においた。S D 111のみは、出土遺物からみて早く廃絶したと考えられる。S D 103・104・105・107は相接する時期であろうが、S D 104・107の2条が一体となって掘削されていて、S D 103はS D 107に意図的に接続させたと受けとれること、また出土遺物をみると前2者の方が年代幅があることから、そこに前後関係を想定できる。S D 105もあまり長期に存続した遺構とはおもえず、S D 103出土の皿に共通した特徴を備えている点から、これら二者の上限を鎌倉時代中期におきたい。またS D 110は遺構相互の関連性が乏しく、出土遺物のみから推して鎌倉時代初期と考える。第1群の遺構中、S A 11の年代比定は困難であるが、切り合い関係からS D 111廃絶以降であり、一部第2群の遺構と同レベルで検出されていることから、第1群の中でも最も下る時期であろう。S K 23・24とS B 21との前後関係は層序からみてははっきりしており、S B 21は室町時代の中期までは遡りえない。井戸S E 22・25については、堆積土と出土遺物の上から一応表のように比定した。S A 301～348について

第4表 主要遺構の年代観 は、A層の下に江戸時代の遺物を多数包含する整地層がW-1区に広く検出できることから、中期以降の施設と考えたい。なお、これらの柵列は数次にわたるものであったはずである。また、ラチス状掘形列がこれ以降のものであることはすでに述べたとおりで、明治維新前後の掘り込みであることは確実である。以上のように、今回の調査で検出した遺構を年代比定してみた。

再度翻って出土遺物に検討を加えるのが次節の課題である。(岡田)

4 遺物

本調査では、コンテナ約140箱分の遺物が出土した。そのうち、比較的まとまった資料として土器類・瓦類が掲げられる。土器類は土師器、瓦器、瓦質土器⁽¹⁾、須恵器、須恵質土器、緑釉陶器、灰釉陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器に大別できる。他に石製品、土製品、金属器などが出土している。本書では、遺構内から一括して出土した遺物を中心に論述する。

土師器 皿、高坏、埴、土釜および盤がある。皿は大きさの上で、大・中・小・極小の4グループに大別できる。それぞれの口径は大が14～15cm、中は10～12cm、小は8～9cm、極小はヘソ皿で7cm弱である。本遺跡出土の皿で特徴的な点は、口縁端部の外側を強くナデて断面を逆V字型に仕上げることである。それが極端な場合、口縁部を内側にやや折り曲げ気味につまみあげるタイプが生じる。ただし、この特徴は古い時代ほど口縁のつまみ方が弱く、かつすべての大きさの皿にわたる傾向がある。時代が下っても、大・中の皿ではこの特徴が残るが、小皿ではほとんどみられなくなる。次いで肉厚の点では、S G 11、S D 111などの遺構出土の皿は、口縁部から底部まで一様に厚く丸味を帯びたものが圧倒的に多く、時代が下ると底部を薄く作り、体部は立ち上がり部分で角度がついて厚く直線的な断面のものがめだつ。後者のタイプでは立ち上がり部分の内面を指で強く押えた痕が顕著である。そのほか、第3群の遺構からはまれにしか出土しない薄手の白っぽい皿が、S K 23・24などの土坑からは多く出土する。また時代が下ると底部から体部にかけ様々に屈曲させる傾向がみられ、極小タイプのヘソ皿を伴う。

高坏はいずれも白っぽい焼成で、脚部には11面以上の面取りがある。なおS D 110出土の例(H H 43)は、底部内面から端部にかけてススの付着があり、脚部を上を立てて灯明皿として再利用したと考えられる。

S D 104から出土した埴(H H 25)は、白味の強い淡褐色で、焼成はもろいが貼付高台はしっかりしている。これに対して、E-1区中央のB層から出土した埴(H H 82)は、色あいこそ白く焼成されているが、口縁部の凹線や痕跡的な断面三角の貼付高台、内面のヘラ磨きなど、瓦器埴の特性を多分にそなえている。

土釜H H 19は、S G 11の底面粘土層より上の砂質土中から出土したもので、平安時代の末と考える。明かるく淡い赤褐色で、「く」の字形の口縁部はかなり内傾し、三角断面の小鍰との間は外側にみくらむように厚みをもつ。内外面は丁寧にナデ調整している。平安京左京四条一坊〔平安京調査会75-E 088〕の出土品に類似するが、口縁端部の形態が若干異なる。H H 84は、E-2区C₂土層からの出土で、内面には粗く鋭いハケ目、鍰は幅広で水平、口縁はやや彎して外側に2本の稜線が見える。

H H 83は厚手で小型の盤である。胎土に砂粒を多く含む。内面はナデ調整。口縁端部はやや丸味をもつ。E-2区C₂層からの出土である。(岡田)

瓦器・瓦質土器 H Z 01は、やや横にはり出した底部には外反する口縁部がとりつく小皿で、内面にはジグザグの暗文がある。H Z 04は、つやのない褐色を呈する小皿で、S

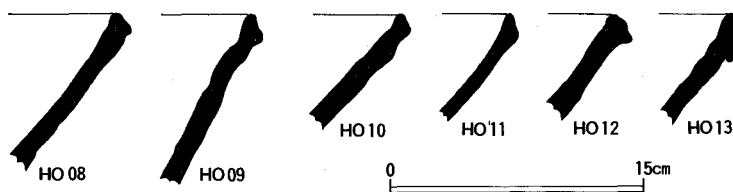
D 104 の出土である。白石太一郎の編年試表〔白石69〕による第10型式の瓦器埴に酷似している。H Z 02はごく低い貼付高台がつく埴で、S D 103 から出土した。E-1区B層出土の埴（H Z 07）と同様、白石編年の第8型式頃のものであろう。S D 103 から出土したH Z 03は、平底の広い底部から体部への立ち上がりが直角に近い角度を持つ埴である。口縁端部は水平に切られ、内面にはかすかなへう磨きの痕跡が水平に走る。口径17cm。H Z 06はE-1区のサブトレンチ掘削中に出土したもので、やや高い高台を貼り付け、内面には縦横にへう磨きの痕跡がある。外面は粗いへう磨きの上からナデ調整している。

羽釜H D 03は口縁部が体部から「く」の字形に折れ曲がってわずかに外反気味に内傾する。折れ曲がりの稜の上に沿って断面三角形のH H 19とよく似た鍰がつく。鍰のつく部分にあたる内面には指押えの痕が明瞭にみられ、口縁部の外面と上端面はナデ調整している。これに対し、H D 04は口縁部・体部がほぼまっすぐに立ち、鍰の端部は面がとられて断面は四角形を呈し、口縁部上端はへう磨きによって凹面となる。内面にはハケ目、外面には指押えの痕が顕著である。出土状況からH D 04がH D 03に先行することはないと考える。土鍋H D 05はS D 104 から出土した。体部はまっすぐに立ち、その上端からはほぼ同じ厚みで直角に外へ張り出した「く」の字形の口縁部は、上端面に1条の凹線がめぐりその上をへう磨きする。これに対し、土鍋H D 07は口縁部が体部より厚く、外への張り出しも弱く、上端は指なでによって仕上げられ平滑である。

H D 02・08・09は黒色、H D 06は淡赤褐色を呈する瓦質の盤である。H D 02は脚付きの⁽²⁾盤で、口径48.0cmをはかる。底部は厚さ0.5cmと薄く、底部から体部へ、体部から口縁部へと二段に軽く立ち上り、上部へ行くにしたがって器壁の厚みを増す。口縁端部は特に外側へ張り出すように厚く仕上げている。内面にはへう磨きの痕跡がある。H D 06は口径39.2cm、脚のない盤である。底部から体部半ばまであまり厚みは変わらず、そこから口縁にかけてやや外反しつつ厚みを増し、口縁上端は丸みをもつ。H D 09は口径57.5cmをはかる大型の盤で、体部半ばから口縁部にかけて極端に厚くなる。口縁端部の上面は平らでわずかに内傾する。H D 08は、隅丸方形の盤である。断面三角形の低い貼付高台がつく。体部はやや外傾し、口縁部は上方ほど器肉が薄い。他の破片によると、口縁部には刳形がつくらしい。破片の一部はS D 106 から出土したものである。H D 01は、丸味のある体部外面の半ばに段のつく厚肉小型の盤である。（岡田）

須恵器・須恵質土器 平安時代中期以前の須恵器の破片がわずかに出土しているが、本遺跡では、甕と大平鉢が須恵質土器の主流である。

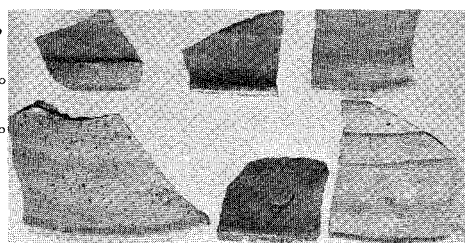
S D 102 出
土の甕 (H D
05) は、整っ
た口縁をもち、
焼成もよい。



第13図 大平鉢の口縁部(1)

これに対し、SG 11出土の甕 (H D 01) は軟質で、口縁は丸みを帯び、体部に平行条線叩きを施す。前者の方が年代的に先行するのは明らかである。

一方、平安時代後期に現われる大平鉢は、硬質のものが多い。捏鉢、擂鉢として用いられることを考えれば当然である。H O 01, H O 07は

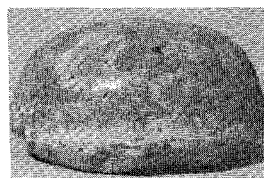


第14図 大平鉢の口縁部(2)

ともに硬質であり、この器形の底部と考える H O 03, H O 06 も同様である。口縁部には片口がつくものが多い。H O 01 と H O 07 の口縁部を比較すると、後者では大きく発達した特徴がみられる。今回の調査で出土した他の口縁部の破片のうち、遺構内出土のものを抽出して実測した (第13・14図)。第1群の遺構からの出土例 (H O 08~12) と第2群に属する S K 23 出土の (H O 07, H O 13) とは明らかに相違する⁽³⁾ことがわかる。

H O 04 は、S D 108 の底面近くから出土した黒色の蓋で、身部を欠く。上面に文様を刻む。*器壁は薄く、焼成は堅緻である。(岡田)

陶磁器類 遺構内出土の緑釉陶器は4点である。S D I 08 出土の H G 11 は糸切痕のある切り高台で、内面に釉はかからないが外面は高台全面にまで濃い緑釉がおよぶ。高台径が12cmにも達することから、壺の器形を想定したい。H G 02 は S D 105 出土の高台付の皿で、淡緑色の釉を内面に施す。H G 03 は S D 110 および付近のC層中から出土した三筋壺の破片である。赤褐色の胎土に黄緑色の釉を施し、2条ひと組の沈線が胴部上下に各1本、さらに頸部のつけ根に一本刻まれる。胴部の最大径は推定21.5cmをはかる。国産品か輸入されたものか異説がある。陶器ではないが、後代のラチス状掘形の埋土中から淡い緑釉のまんじゅう形土製品1個が出土した (第15図)。大治三 (1128) 年、白河法皇が供養した18万基の円塔に比定されるものである〔西田24- 〕。



第15図 土製円塔

平安時代の灰釉陶器と云うるものに、S D 104 出土の小碗

H A 02とS D 108の底部粘土層上面から出土した小埴H A 01の2点がある。前者は猿投東山窯産とみられ、後者は末期的な灰釉陶器の埴である。このH A 01は、古常滑焼におけるいわゆる山皿に移行する直前の器形で12世紀初め頃のもものと認めうる〔桧崎74〕。それに対して、S D 103出土の小埴H K 05になると、高台の偏平化が進みほとんど無釉で、山茶埴と共伴する山皿とよぶべきものになる。古常滑編年図によれば、H K 05は12世紀後半にあててよいものであろう〔桧崎75〕。これと同じように灰釉陶器の系統をひくものに、大平鉢がある。図示したH K 01, 07, 08以外にも、本遺跡の各所から多数出土している。産地は愛知県猿投窯のものが多く、口縁部にうすい自然釉がかかっている。大きなもので口径30cmをこえ、小型では20cm程度のものもあるが、いずれも高い高台を丁寧に貼りつける特徴があり、古常滑の編年の上では鎌倉時代初期の器形にあたる。これらの大平鉢と共伴して山茶埴も多数出土している。胎土、焼成ともに大平鉢とほとんど変わらないが、偏平な貼付け高台がつく点が大平鉢と異なる。S G 11から出土した2点では、H K 02が平安時代の末、H K 03で鎌倉時代前半にあてることができよう。他の国産陶器類では、常滑焼の底部で、内面には淡緑色の釉が全面にかかる。H K 06はS D 110からの出土で、鎌倉時代初期の特徴をとどめる。甕一個体分が復元できたKH 09は、破片の一部がS D 102から出土している。常滑焼で、やはり鎌倉時代初期の特徴をもつ。(岡田)

輸入陶磁器 第1群の遺構と関連して、宋から元に至る輸入陶磁器が多数出土した(図版)。その中でも、白磁水注の底部(P 02)、シノギの弱い蓮弁文を有し口縁部が明褐色を呈する青磁埴(P 03)、深く鋭い片切彫の文様を描く青磁埴(P 04)などは時代がさかのぼる可能性がある。最も多い磁器は、宋・元代に輸出用として量産されたと考えられる南方地方窯産の白磁ないし灰白磁の埴・皿類である。次いで竜泉窯系と同安窯系とのへら描き、猫掻きを組み合わせた文様の埴、皿が多い。器形としては、皿・埴のほかに水注、四耳壺(H P 07・08)、鉢などがある。

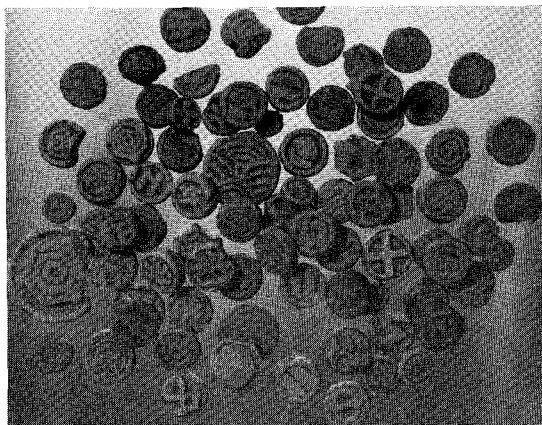
陶器としては、宋代の黄釉鉄絵の洗の底部が二点出土した(H P 05・06)。(岡田)

石製品 石製品としては硯、鍋、砥石がある。S D 108から出土したH R 01は、五角形に面取りされた海の浅い粘板岩製の硯である。H R 07はこれよりやや作りの丁寧な硯で、円形播鉢状に海が彫りこまれている。石材はホルンヘルスである。

石鍋類の石材はすべて蛇紋岩・橄欖岩と総称できる超塩基性岩の加工品で、少しずつ色調が異なるのは鉱物の組成の差によるものである。遺跡各所から多数出土しており、推定口径は最大29.5cm(H R 06)、最小14.6cm(H R 08)である。鐔は口縁上端から1.5～2cm

このほか、粘板岩製の黄褐色の砥石も数点出土している。(岡田)

—58—



第17図 泥面子 (2)



第18図 伏見人形

近世の伏見人形に類するものである(第18図)。玩具類の中では泥面子の出土が多く、約100点に達する(第16・17図)。その文様は多種多様で、同じ意匠のものはあるが同範といえるものはない。また、小は1.5cmの梅鉢紋から大は6.0cmに至るまで大きさも様々であるが、ほとんどは2.5～3.2cmの直径におさまる。(岡田)

火 舎 E-1区中央で、C層掘削の途中に小ピットから饗銅製の火舎および六器が出土した(図版21・第19図)。器面にはわずかに金粉がのこる。同様の火舎は和歌山県白浜町や京都府花背別所第一経塚などから出土している〔奈良国立博物館73〕。本火舎はそれらと器形・猪目の透しが酷似し同じ平安時代末の製品と考えられる。(岡田)

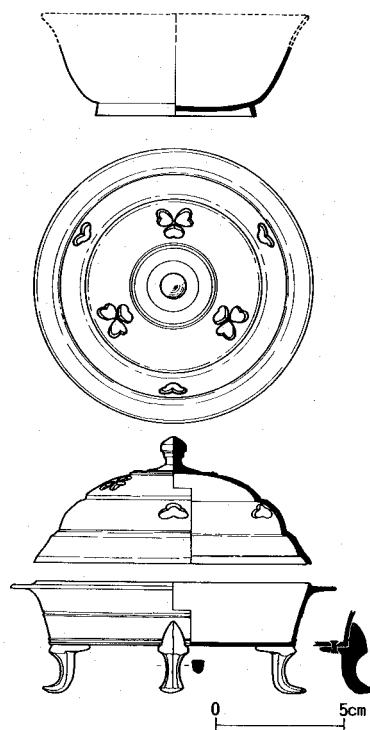
瓦 類 本調査地の各所から出土した瓦類は、軒丸瓦19点・軒平瓦40点・平丸瓦片多数である。本書では、紙数の関係上、個々の記述は省略し、軒瓦類に限定して総括的な所見のみを報ずる。

瓦類の出土状況は、特定の建築遺構に伴うものでなく、層位的には第3層(C層)に集中傾向があるとしても、その共伴関係性は稀薄である。しかし、軒瓦類を型式学的に検討した場合、近世の軒平瓦2点を除くと、すべて12世紀中葉～後葉の特徴をそなえており、平安後期の軒瓦としては比較的まとまった資料である。以下、議論の都合上、軒平瓦を中心に記述する。

出土した軒平瓦は以下のように細分が可能である。

A類・京都市左京区幡枝の栗栖野瓦窯(西田・梅原34)を中心とする中央官衛系瓦窯の製品と推定されるもの(H T 19～29・31～32・43～50)。

AI_a類（HT19～24） 平瓦部凹面に対して瓦当部面が鈍角をなしてとりつく。瓦当部は平瓦の広端部を凸面がわに屈曲させ、主に凹面がわに別粘土を補充して成形する（HT23・24）。HT20の場合は別の方式によっているが、粘土接合面が不分明で説明し難い。HT20との同範例では、平瓦広端部の凸面がわに別粘土をはりつけて瓦当部とした例（六勝寺研究会75―図21の189―）と、HT23・24と同様の方式で成形した例（杉-1山・岡田61―171B型式）とを実見している。瓦当裏から頸部にかけては、ヨコナデ調整を施す。ただし、HT23・24においては折り曲げ後、頸部に縦位の縄叩きを施している。頸部下端は2～3回の横位ヘラケズリによって調整する。HT20～24の瓦当文様は、11世紀後半に中央官衛系瓦窯で新たに採用された瓦当文様の系譜をひき、HT20などは製作技法においても12世紀前半頃の様相を残す。いずれも瓦範の磨耗のため文様面に横位の木目痕が走っている。



第19図 火舎および六器

AI_b類（HT25～27・29・31～32） 平瓦部凹面に対して瓦当面が鈍角をなしてとりつく。瓦当部はHT32のように特異な成形法によるものもあるが、基本的にはHT23・24と同種の方式によるものが多いと想定している。凹面の瓦当部近くの幅1cm弱は布目圧痕が及んでおらず、粘土がやや隆起し、横位の調整痕を施す。これは凸型台（平瓦1枚造り用の台）上に、粘土板の広端部を台の端よりややみだして置き、瓦当部を成形した結果であろう。平瓦部凸面は縦位のナデ整形による凹凸が著しく、瓦当裏から頸部はヨコナデ調整を施す。瓦当裏には瓦範押捺に際しての指圧痕が認められる。頸部下端は横位1回のケズリもしくはナデによって調整するため、AI_a類とは形状がやや異なる。ヘラ記号は凸面に認められる（HT27）。製作技法は画一的で、醍醐栢杜遺跡八角円堂址に伴う軒平瓦群（鳥羽離宮跡調査研究所75）と共通する。瓦当文様はHT29の如く前代の系譜をひくものもあるが、HT25～27やHT31・32のような巴文・幾何学文が主流を占める。また、この1群においては剣頭文は稀少であり、栢杜遺跡八角円堂址でも先端の丸い蓮弁を並べた「剣頭文」が認められるにすぎない。この点において、次のAII類とは区別される。大蔵卿

栢杜堂が供養された久寿2（1155）年を上限とする実年代が考えられる。⁽⁴⁾

A II類（HT43～50） 木村捷三郎氏の言う「完成した段階の折り曲げ造り」⁽⁵⁾による製品である。その分析対象となった鳥羽南殿比定地内出土I₁型式の剣頭文軒平瓦（細谷68）においては、平瓦部凸面の縦位の縄叩き目が瓦当裏にまで連続し、頸部に折り曲げに際して生じたシワを有する製品が主流を占めているが、本遺跡出土の1群においては、それとはやや異質の特徴を指摘し得る。即ち、瓦当文様面の突出した部分に凹面から連続する布目圧痕を顕著に残す点（HT44・46・47）は鳥羽南殿例に等しいが、頸部に連続的な指圧痕（HT44・47）もしくはヨコナデ（HT43・46・48・49・50）を施し、折り曲げに際して生じたシワを消去する。瓦当上端は横位のへう削りで斜めに仕上げる。また、平瓦部凸面は、縦位の縄叩きを施す例（HT46・48・50）よりも、指圧痕・ナデのみで整形する場合が多い。頸部下端に縄叩きを施す例はHT50のみで、他は横位のへう削り・ナデで調整する。以上述べた諸特徴は、技法の簡略化という方向性のなかで軒平瓦折り曲げ造りが完成したと考えるならば、調整段階などにおいて鳥羽南殿比定地内出土I₁型式の剣頭文軒平瓦よりも古式の様相が強く、実年代としてはAI₁類に近い年代を想定し得る。へう記号は凸面に認められるもの（HT46・47）とがある。

A Ⅲ類・製作技法において、中央官衛系瓦窯の製品と共通する面が多いが、細部で異質な技法あるいは異質な瓦当文様を有するもの（HT28・30・33・36～38）。瓦窯系統の比定は保留しておく。

HT28は技法的にはAI₁類に近似する。ただし、瓦当裏から頸部にかけて曲げジワを残し調整を省略している。同范例は鳥羽南殿比定地内より多数出土しており（細谷68-G₁型式）、HT07の巴文軒丸瓦との対応が考えられる。HT30・38はA II類と共通の技法による唐草文軒平瓦である。特にHT30は細部の調整法においてもHT45などと同一である。HT33・37の瓦当部成形法は不分明である。平瓦部凸面には瓦当部成形後、縦位の縄叩きを施す。特にHT37においては、縦位の縄叩き後、さらに図版の左上から円弧の縄叩きを施している点が注目される。HT36は小片でよく判らない。

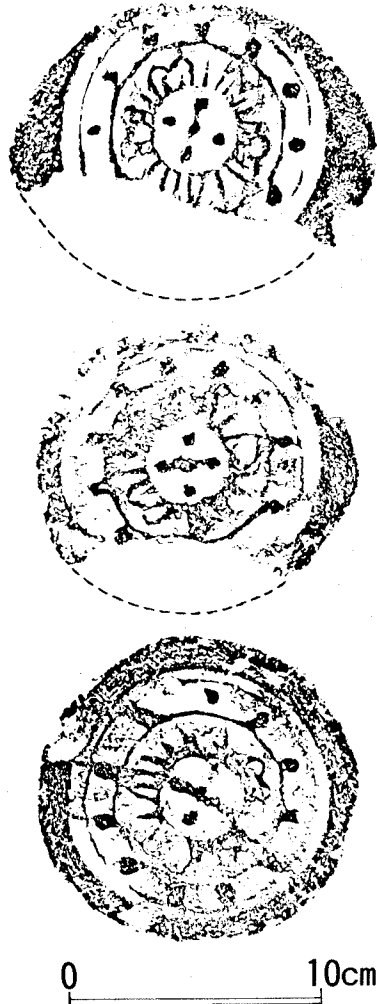
B類；亀岡市王子瓦窯（安井60）を中心とする丹波系瓦窯の製品と推定されるもの（HT34・35）。ともに現在のところ同范例が瓦窯址から出土していないが、焼質・製作技法・瓦当文様から、丹波系瓦窯の製品のなかでも比較的年代の下降するものと推定される。平瓦広端部を凸面がわに折り曲げて瓦当部を成形しており、平瓦部凸面には粗い縄叩きを施す。HT34では瓦当裏に横位の縄叩きを施す。ともに淡灰色を呈し、焼成はやや軟質。

C類：兵庫県神戸市神出古窯（真野74）・明石市三本松古窯（島田39）・高砂市魚橋瓦窯（今里55）・三木市久留美古窯・与呂木古窯（是川70）などの旧播磨国内に分布する瓦陶兼業窯の製品と推定されるもの（HT39～42）。瓦当部上端よりやや下方に平瓦部がとりつき、平瓦端部を包み込むように瓦当部を成形している。瓦当上面から凹面にかけて、顎部下端から瓦当裏にかけては、ともに横ナデで調整する。焼成は堅緻で、釉がかかり黒光りするものもある（HT39・41）。HT42においては、平瓦部凹面に糸切痕と布目圧痕とを残し、凸面には格子目叩きの痕跡がかすかに残る。通常の播磨系瓦窯の製品では、平行条線叩きが顕著であるが、本例はやや異なる。

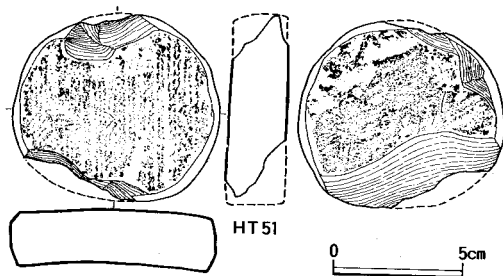
以上、軒平瓦を中心に分類してきたが、これに軒丸瓦を対応させると、A類およびA亜類にはHT01～13が対応し、C類にはHT14～16が対応することが、焼質・技法などから明らかである。しかし、偶然余ったB類と軒丸瓦HT17・18とを対応させるにはかなり勇気が要る。

A類とA亜類とに対応するHT01～13のうち、HT08～13の巴文軒丸瓦は主としてAI_b類およびAII類に対応する。AI_b類の段階に相当する栢杜遺跡八角円堂址では出土軒丸瓦の約72%が巴文意匠を用いていたと報ぜられており（鳥羽離宮跡調査研究所75）、この段階で既に巴文意匠が瓦当文様の主流を占めていることが判る。

主に軒平瓦AI_a類との対応が想定される軒丸瓦HT01～05においては、瓦範の磨耗が著しい点が指摘できる。HT03・04の磨耗状態は特に著しいが、その磨耗の諸段階は鳥羽南殿比定地内出土D₁型式軒丸瓦群（HT03・04と同範）において辿ることができる（第20図）。この場合、瓦範の磨耗に従い、本来左右径の長い楕円形の瓦当面を有していたものが小形正円の瓦当面へと変化することが指摘できる。楕円形瓦当面の軒丸瓦は、



第20図 瓦範磨耗の諸段階
—HT03軒丸瓦同範例における
範の磨滅と瓦当面の正円化—
—（上1個は円勝寺、下2個
は鳥羽南殿比定地内出土）



第21図 瓦製円板

丸瓦部の径（これは模骨の径によって規定される）が14cm内外であるのに対し、瓦範の径が小さいことから生じたもので、中央官衛系瓦窯において12世紀中葉のかなり限定された時期に製作されたと考えられる。

その意匠は大部分が蓮花文であり、小形正円瓦当面の軒丸瓦に巴文意匠が顕著である

ことと考え合わせるならば、巴文軒丸瓦普及の上限年代を画期づける重要資料である。

以上述べたように、A類軒平瓦は基本的に $AI_a \rightarrow AI_b \rightarrow AII$ という変遷を辿ったと考えられるが、本遺跡出土の AI_a 類軒平瓦およびそれに対応する軒丸瓦の一群においては、範の磨耗状況などから AI_b 類に近い実年代を考えざるを得ない。また、 AII 類軒平瓦も、それを余り下降するものではないとするならば、本遺跡出土の軒瓦類の実年代は12世紀中葉から後葉のかなりの短期間に限定し得る。これは、C類軒平瓦が巴文軒丸瓦と対応している事実、B類軒平瓦が円波系瓦窯の製品としては年代の下降するものである点とも矛盾せず、出土状況における相伴関係性は稀薄でも、型式学的にそれが呈示し得る資料として、これを報告する次第である。

なお、そのほか特異な遺物として、第21図に示した瓦製円板がある（HT 51）。これは、平瓦の破片の周囲を研磨して円板状に仕上げたもので、同様の品がもう一点出土している。後世の二次的加工であることは確実だが、用途は不明である。（上原）

5 むすび

病院構内の発掘調査は今回がはじめてであった。調査の結果、本構内には予想した以上に遺物・遺構が稠密に包蔵されていることが確認できた。しかも最終遺構面で検出した主要な遺構は平安時代後期から鎌倉時代のもので、それ以下の層は鴨川・高野川等の氾濫礫層の堆積となり、北部や教養部構内とは異なった性格の遺跡であることが判明した。病院の南と東にひろがる往古の白河に院の御所や六勝寺の堂塔が集中して建てられた時期と重なりあう時代の遺跡であることを指摘できる。

今回の調査結果をあらためて見なおしてみると、まず、平安時代末に遺構群のまとまりがあり、それが出土瓦の限定された年代とほぼ対応関係にあることに気づく。その場合、同年代のSD 102が道路の側溝となりうることを、それ以西は急に遺構の密度が低くなるこ

とに注目される。

本書第1章で考察したように、本遺跡に近接した地点に白河北殿が存在したことは確実で、その造立は元永元（1118）年である。そしてその北辺には、院の近臣たちの役宅が建ちならんでいた。さらに、白河北殿の内外には平安時代末に多数の御所や堂塔が建てられた。また熊野神社の創始は康和五（1103）年のことで、室町時代中ごろには現在の病院構内を含む広い範囲が境内地になっていた。その中に別郭をなして、崇徳上皇の廟所粟田社がある。寿永三（1184）年に創始され、嘉禎三（1237）年に東遷したというものである。

本章に略述した遺構群をどのように比定するかということは可能性は指摘できても速断することではない。今後は、発掘結果の詳細な検討はもちろん、大学構内という視点だけではなく、白河とよばれた地域全体にわたる文献的考証と、次数を重ねつつある六勝寺関係の発掘調査の成果等をふまえた総合的な考察が必要とされるところである。（岡田）

註

- 1, 厳密な意味で瓦器と瓦質土器とを区別することはできないが、本書では便宜上、土師質・須恵質・磁器質以外のいぶし焼きされた軟質土器のうち、埴・皿のみを瓦器と呼び、他の器種（羽釜・鍋・盤など）を瓦質土器と呼ぶ。
- 2, 破片のため脚一定を残すのみであるが、本来は三脚を有するものと考えられる。
- 3, 第3章の3, 遺物の項参照。
- 4, 栢杜遺跡八角円堂址は『醍醐寺雜事記』では桧皮葺と記された「大藏卿堂(八角二階)」に比定され、伴出瓦は桧皮と混存していたという。従って、大藏卿栢杜堂が供養された久寿2年に、これらの瓦が使用されていたかどうかは問題の残る点である。しかし、他の寺院等の同型式瓦の出土状況から推定して、久寿2年よりも大きく下降する実年代は考え難いのが実情である。
- 5, 1971年8月25日、平安博館、第5回瓦の会にて口頭発表。

参考文献

- 今里幾次 1955年「播磨国魚橋瓦窯址の研究」『兵庫史学』第6号
是川長 1970年「三木市の古窯と経塚」『三木市史』
島田清 1939年「播磨国東部地方に於ける出土古瓦に就いて」『夢殿』第19冊, 綜合古瓦研究 第2分冊

白石太一郎 1969年「いわゆる瓦器に関する二・三の問題——古代末～中世初頭における
土器生産と流通に関する考察——」『古代学研究』54号

杉山信三・岡田茂弘 1961年「尊勝寺発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報』第10冊

鳥羽離宮跡調査研究所 1975年『栢杜遺跡調査概報』

櫛崎彰一 1974年『日本の陶磁 古代中世篇』

第1巻

1975年『日本の陶磁 古代中世篇』

第2巻

奈良国立博物館 1973年『経塚遺宝展目録』

西田直二郎 1924年「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊

西田直二郎・梅原末治 1934年『栗栖野瓦窯址調査報告』『京都府史蹟名勝天然紀念物調査
報告』第15冊

平安京調査会 1975年『平安京跡発掘調査報告——左京四条一坊——』

細谷義治 1968年「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報 1968』

真野修 1974年「雌岡山周辺の古窯址——神出古窯址群 (1)」『神戸古代史』Vol.I-No.3

安井良三 1960年「篠町A号瓦窯址」『亀岡市史』上巻

S A	延 長 (m)	柱穴数	平均スパン (m)	325	19.50	9	2.44
				326	12.35	6	2.47
301	22.40	10	2.49	327	20.15	9	2.52
302	13.15	6	2.63	328	22.90	10	2.54
303	15.05	7	2.51	329	14.70	7	2.45
304	20.55	9	2.57	330	10.25	5	2.56
305	17.15	8	2.45	331	7.80	4	2.60
306	16.30	8	2.33	332	12.65	6	2.53
307	12.55	6	2.51	333	7.80	4	2.60
308	10.15	5	2.54	334	4.85	3	2.43
309	12.20	6	2.44	335	5.175	3	2.59
310	9.65	5	2.41	336	23.77	11	2.64
311	15.80	7	2.63	337	28.85	13	2.62
312	12.35	6	2.47	338	31.30	13	2.61
313	12.40	6	2.48	339	16.05	8	2.68
314	15.75	7	2.63	340	23.45	13	2.61
315	21.70	10	2.41	341	25.60	13	2.56
316	15.0	7	2.50	342	29.30	13	2.66
317	12.50	6	2.50	343	23.80	11	2.64
318	14.75	7	2.46	344	26.25	11	2.63
319	19.25	9	2.41	345	28.60	13	2.60
320	12.80	6	2.56	346	28.00	13	2.55
321	9.55	5	2.39	347	5.20	3	2.6
322	15.15	7	2.53	348	4.9	3	2.45
323	12.55	6	2.51	349	4.9	3	2.45
324	14.45	7	2.41				

第 5 表 第 1 遺構面棚列計測表